

平成28年度知事と県民の意見交換会概要

テーマ：次世代を担う若手農業者の定着と魅力ある農業の展開

日時：平成28年8月10日（水） 14:00～16:30

場所：果樹農家のレストラン「しらかみカフェ」

※意見交換に先立ち、B氏のネギほ場を視察。

【知事あいさつ】

県政はあらゆる分野に跨がっており、1つの分野にかかりきりになるというのは難しく、施策を作る際にも間接的にはあるが、農林、福祉、産業等の様々なセクションから情報をもらい、それを議論して政策を決定している。例えば、農協の理事長との会議や地域の会長との情報交換は定期的に行っているが、現場の臨場感のある話はなかなか入りにくい。したがって、毎年このように各地域を回って子育てや商工業、まちづくり等について話を伺っている。

昨日は、鹿角で地域づくり活動について活躍されている女性の方々の話を伺い、今日の午前中は大館で観光の中心を担っている若い方々の話を伺ってきた。ここでは、農業について話を伺う。

農業というと、今はTPPの問題もあるが、日本の農業は大きな岐路に立っている。例えば、米は前年比で消費量が約2%減っている。米の消費量は人口減少率よりも減っている。だから米には未来がないということではないが、食生活の変化や都市型の生活に移行していることで米に対する需要は益々減っていく。日本の米は安全・安心で海外で売れば良いと言われるが、海外、特に東南アジアは日本以上に米の主産地である。日本は米を作っている国の中で1番小さい。そういうところで米を売っても僅かしか売れない。秋田の農業が非常に疲弊しているというのは、米についての依存度が高いからである。日本では秋田が約60%、山形が約40%、新潟が約50%だが米菓へ行く比率が高い。

野菜等の農産物の輸入に関しても安全・安心の面から国民は国産のものを求めていることから、売れないものはある程度減らしながら売れるものを作る。ただ、製造業と違い、工場を作ればすぐできるものでもなく、地質や歴史的経緯、水、気象状況で左右されるので、県ではできるだけ米以外の野菜、果樹、花、畜産を増やして付加価値をつけて秋田の農村を守ろうということをやっている。

今日は、皆さんから今やっていること、将来の目指すところ、今やっていることの課題や悩み等の率直な気持ちを伺いたい。

【参加者自己紹介】

(A氏)

2014年3月に東京都昭島市から秋田県に移住してきた。青年給付金をもらいながら農業法人で研修を行い、今年4月に県の移住就農まるごと支援事業を活用し独立就農した。

妻が能代市出身ということもあり、いずれは秋田で農業ができればと思っていたが、自分で何かやりたいという気持ちが高まり能代市への移住を決断した。現在は9.4反歩にネギとキャベツを作付けしている。

(B氏)

就農4年目になる。技術センターや農業試験場のマニュアルがあり、その通りに作ればそれなりの物ができるので非常に助かっている。ここから更にどうやって大きくしていくかというところが今1番悩んでいる。

(C氏)

県外出身で幼少期は仙台で長く過ごした。大学卒業後、東京で外資系の金融会社に勤めていたが、リーマンショックのときにこれからの生き方を考え、秋田に移住することにした。農業については、始めは老後にやろうと思っていたが、少し方向転換して農業を軸にして生計を立てることにした。

現在は有機の多品種少量生産で基本的には宅配を中心に販売している。無謀なことをしているという思いはあるが、今年始めたばかりなので、失敗もあるが方向性を探そうとしている段階である。

(D氏)

就農3年目になる。去年からは妻も新規就農した。もともと父の手伝いという形で農業に携わっていたが、今は八森に住みながら実家に通い、父とは別の経営で農業をしている。

現在は米を中心に作っている。米と言っても主食用ではなく加工用としてもち米を契約栽培している。その他に蕎麦も二毛作で作っている。荒れていく農地が増えていく中で、地域の人たちから依頼され、法人が嫌がるような条件の田んぼばかりが集まってきている。これからも農地を増やして、将来的には農業法人を作りたい。

(E氏)

現在は、県の試験場で行っている未来農業のフロンティア育成研修により研修中で、来年4月から本格的に経営を始める。祖父が米、父が花をやっており、祖父が怪我をしたことから米の部門を祖父に代わってやることになった。

米の現状は芳しくないなので、うるち米だけではなく、酒米にもチャレンジしてみようと考えている。現在、能代グリーンファーム常盤で研修しているが、喜久水酒造さんに研修に行く予定である。

(F氏)

有限会社大和農園という野菜を専門に作っている会社を経営している。そこではハウス60棟でチンゲンサイとネギを作っている。それから直売所の有限会社ねぎっこ村も経営、そして大野台グリーンファームを再建した。大野台グリーンファームではキュウリ、キャベツ、業務用の小松菜とハウレンソウ、そしてウドをツムラという漢方の会社に納めている。今日は若い人の参考になればと思い参加した。

【意見交換】

テーマⅠ 若手農業者が定着するにはどんな問題があり、どうやって解決するか。

(A氏)

農業に携わっても良い賃金を貰えないというのが定着しない1番大きな問題ではないか。個人でやってもそれに見合う給料が貰えなければ定着もしないだろうし、新しい人が入ってこないと思う。農家で生まれた長男の人も金銭面の厳しさからなかなかやりながら

ないのではないかと。やはり生活していくための最低限の賃金を貰えるということが重要だと思ふ。

(B氏)

秋田県に農家の長男はたくさんいると思うが、どうしても目先の給料を考えると農業をやる人は少ない。お金のことだけではなく、地域であったり親であったり県全体のことであったりと、グローバルな考え方をを持った人材が農業には必要だと思う。経営だけではなく、人を磨くことのできる研修が必要ではないかと思う。

(C氏)

東京で開催されている新規農業者フェアや、三種町に短期研修で来る人と話をしていると、やはり何が大事かと言われると結局やっている人は夢でやっているんじゃないかと感じた。私自身農業を始めようと思ったのは、命のつながりを感じてみたいという思いからスタートしたので、本物の農家の人からは農家じゃないと言われる。しかし、そういう思いがあれば、多少無理してでも始めているし、先輩の就農者を見ていると、たとえ経営的に苦しくても夢があるから頑張ってる。そのような農業に対して夢を持てる環境を作ることができれば、若い人の心も動くのではないかと。

(D氏)

とにかく儲けたいという考えでやってきた。農業はもともと「汚い」、「きつい」、「稼げない」、「結婚できない」など、悪いイメージが多いと思うが、稼げないというところだけは、実際に稼いでいる人もいるので違うのではないかと思ひ、自分も稼いでいる人を目指して農業をやってきた。実家が農家だが戻ってこない人はやはり農業に対し、悪いイメージがあるから戻ってこないのだと思ふ。私はそのような人たちの見本となれるように稼げる農業を目指してやっている。

(E氏)

今の子どもたちは農業に触れる機会があまりないと思ふ。自分が小さい頃は小学校のときに芋掘りなどをする機会があったのだが今の子どもたちはあまりやらないようである。小さいときに農業に触れる機会を作り、楽しいと思ってもらえることができれば、将来農業をやってみようと考えてもらえるのではないかという思いから、自分の畑や田んぼに小学生を招待し、農業体験の機会を作りたいと考えている。

(F氏)

この秋田で生きていくにはどうしたらいいのかと小さい頃から考えていたが、自分の目の前に田や畑等の土地があり、これを活かさない手はないと感じた。それと同時に、当時は農業を嫌って都会に就職する時代であったため、逆にチャンスと思ひ農業を選んだ。農業はきつい仕事であるのは間違いないが、結果が早く分かっていいと思ふ。

それから、農業をやっていく上で、お金のことなど一つのことに絞って考えるのではなく、夢や生活、お金等トータルで考えて農業をやるか判断してもらえればいいと思ふ。

(知事)

土地の賃貸について、買い取りなどを含め、どう活かしていくのか。

(A氏)

土地を借りている状態だと、逆に考えると作らなくてもいい作物は作らなくてもいいし、自分の必要な分だけ作ることができる。そのようにして、自分のできる面積だけ徐々に増やしながら土地を買っていけばいいと思っている。条件が悪くなれば借りている土地を返すこともできるので、そこは新規就農者にとってはいいところではないか。

(司会)

機械装備などはどうしているのか。

(A氏)

4月に移住就農まるごと支援事業の補助金を活用し、トラクター等を揃えた。これでやっと農家と同じスタートラインに立てた気がする。

(知事)

酒米は現在足りていない。

(E氏)

足りていないという話は聞いているが、実際は酒造会社に行ってみないと買ってくれるかどうかはわからない。県内だけでは足りなくて、県外から酒米を買っているという現状が酒造会社の中であるので、もしかしたらと考えている。

(知事)

Dさんは、もち米はどこに出しているのか。

(D氏)

大潟村の「利活用秋田」とさんと契約して出している。そこから全国米菓組合に行くと柿の種などのお菓子になる。主食用米は安くなり、田んぼをやめようかと思っていたときにいろいろな人から田んぼ作ってくれないかと言われたのだが、そこは条件が悪く野菜もできず、蕎麦を蒔いても育たないところで、田んぼとして活用しようと思っていたときJA青年部の付き合いで大潟村の人から依頼があった。

(知事)

Cさんは加工もやっているのか。

(C氏)

加工もやっている。夏に採れすぎた分を乾燥させて宅配を中心に販売している。特に冬場は商品が少なくなるので、漬け物や山菜を塩出しした物、乾燥野菜等を組み合わせ、1年を通してお客さんに送れるような商品構成を考えている。冬場の野菜が作りにくい秋田だが、逆に加工の技術は高いものがあるので、そういうところを地元の方に教えてもらいながらやっている。

(知事)

一定のお客さんを持って通販をしていくときに、どうやってお客さんを獲得するのか。

(C氏)

基本的には、今までご縁のある人に売っているのと、有機野菜のイベントなどに出店してお客さんになってもらう形である。個人だけではなく飲食店も含め、100件くらいが月に2回くらい野菜を補充してくれれば、生活できるという計算でやっている。

(知事)

都市部ではそのような需要は増えてきているのか。

(C氏)

世界的に見ても欧米などでは、有機の市場は過去10年くらいで何倍にも増えているが、日本ではまだ0.何%くらいで低い数字であり、だからこそ将来的に成り立つ可能性を秘めていると思う。しっかりやっつけばチャンスがあるカテゴリーだと思う。しかし、全て自分で売り先や品質管理をやらないといけないので頭を使うところではある。

(知事)

昔から農業を続けている人は、秋田県の場合、マーケットが黙っていても存在している。しかし、新規就農の場合は、ニーズの把握からマーケットの確保、品質管理など全て自分でやらざるを得ない。そこで差がついていく。

米しか作ることができずに、そこでなんとなく米を作って品質が悪くても買ってもらえるというのではなく、そこに新規就農者の方を入れ込み、全体を考えながら経営していかないとなかなか難しい。そういう意味で、Fさんのところは経験だけではない先進的な分野である。

そういった点も踏まえて、皆さんの地域とのつながりはどうだろうか。農村社会は地域コミュニティの輪の中でやっているが、新規就農や新しい経営を試行すると昔からの伝統的なやり方でやってきた地域集落とぶつかる場合もあると思うが、どうだろうか。県外出身者の方は特に。

(A氏)

軽トラックで道ですれ違う度に覗かれるが、皆さん聞けばネギの作り方など教えてくれる。特に困ったことはなく、今は温かく見守ってもらっているという状況である。

(C氏)

助けてもらったことは多々あるが、困ったことは特にない。自分自身変わったやり方をしているのか周りから何やっているのかなと観察されているのかもしれない。

(E氏)

基本的には父と祖父から指導されているが、他にも近くの田んぼの方とも顔なじみで田んぼの状況などをよく話す。

農業に関するいろいろな研究会があるが、酒米研究会が能代山本地域にはないので、立ち上げていければと考えている。

(F氏)

私も若い頃は、初めは父からハウス一棟借りてほうれん草を作るところから始めた。し

かし、今まで作った経験が無かったので、市場に行き値段や生産者の情報を得て、その生産者を訪ね、何の肥料を使っているかなどアドバイスをもらいに行った。その他にも研究会などは為になる話が聞けるので欠かさずに参加していた。

現在、私のところには、研修生がたくさん来るが、農業を始めようと思うならその地域の特産、例えば能代ならネギや山ウド、ミョウガなどをやった方がいいとアドバイスしている。なぜなら、その土地に合っているからこそ今まで作られ続けているということと、良い技術が蓄積されているからである。しかし、他の人がやっていないものを作りたくて農業を始める人もいると思うので、そういう人は、生活を特産で安定させ、その安定させた中で自分のやりたい部分を突き詰めていけば、農業者として大きくなれるのではないかとアドバイスする。

(知事)

自分たちが50、60歳になったときにどの姿を目指すのか。農業人口は減り続け、今と同じような面積をこなすには、作物にもよるが、今より少ない人数でやらざるを得ない。規模なのか、質なのか、それぞれの役割は重くなる。逆に言えば大規模法人化せざるを得ない状況になる。そのときにどういった形を目指すのか、考えていく必要がある。

(司会)

Dさんは、最終的にどのくらいの規模まで。

(D氏)

具体的には決めていない。しかし、自分が農業をやっている八峰町石川は農地の担い手がない状況である。育った場所が荒れていくのは嫌なので、将来的に集まってくる農地はすべてやろうかと思っているが、特にどの程度の規模までというのは決めていない。

(司会)

Fさんのところは社員は今何人くらいいるのか。

(F氏)

能代の大和農園で20人。大野台グリーンファームは23人くらい。これを30人ずつまで増やしていきたい。

従業員は、農家の人もいるが、いろいろなところから来ていて、能代の農場長は千葉出身だが、奥さんが秋田の人で今は農場長をやっている。その他にも農家ではない人が多い。特に大野台グリーンファームは、県から若者を育成し、独立させてほしいという依頼でやっているが、まだ独立した人はいない。しかし、大野台という地はキュウリやトマトの適地なので、それらを産地として復活させるとともに若者を独立させていければと思っている。そしてメガ団地にも手を挙げていければ。

テーマⅡ 秋田県の農業の魅力をアップさせるためにはどうしたらいいか。

(B氏)

これからの農業人口の減少に伴い、1人あたりが抱える農地面積は大きくなる。規模を少しずつ大きくしていくのは、自分の中ではナンセンスで、少しずつ機械を増やしていくとかではなくて、やるなら一気に仲間や設備を増やして経営的な面を安定させた上で始めないといけない。経営も安定し働ける環境をしっかりと作っていくことが必要。そして、そ

こを管理する会社も必要になってくる。会社経営を考えると今がチャンスだと思う。それは秋田で農業を始めようとしている人にも言えることである。

雇用に関して言えば、自分のところは能代支援学校が近いので、障がい者の方を受け入れるなど農業法人と福祉法人の連携もできればと考えている。

(A氏)

大規模化を進めていき、しっかりとした雇用の場となるような農業をしていかなければ、持続していかないと思う。ただ、急に大きくはできないので、一つひとつやっていくしかないと思う。

(C氏)

自分のように小規模で多種をやるには、不適地は逆に適している。なので大規模に経営している方と小規模にやっている人とが連携し、一緒に出荷できるような5人くらいのグループを組めればと考えている。そのようなグループがいくつかあれば、スパイスのようにもなるだろうし、秋田の農業の魅力にもなり得るのではないかと思い、進めている。

このような話をするのは好きだが、実際に行動に移す人はなかなかいない。しかし、将来的には大規模経営だけではカバーできない部分をそういうグループの人たちでカバーしていけたらと思っている。

(D氏)

最近農業をやっていて楽しいと感じたことは、地元のお年寄りが車ですれ違うときに笑顔で手を振ってくれたり、自分の農地の草刈りをしていてくれたりと、心遣いがすごうれしくて、いつか地元のお年寄りと一緒にやれるような会社もできるのではと思うこともあった。正直大規模化するに当たっての一番のネックは草の管理なので、そういった部分をお年寄りがやってくれば、一緒にやっていけるのではないか。

(知事)

米に関して言えば、他県の例や日本酒などのように量ではなく質で売らなければならぬ。秋田県の県民性として競争を避けて丸く収めようとするところがある。しかし、最近では変わってきて、個々の農家や農業法人との間で競争が生まれてきている。その中でも、農村の水路だとか全体の管理は協調してやらなければいけない。競争だけではできないという難しさがある。良きライバルとして基盤整備などをやりながら競争をすることが大事である。そういう意味では汎用的な基盤整備が大事。

(F氏)

基盤整備は本当に大切だと思う。なぜかというと、私のところは白神ネギの産地で、30軒を超えるネギ農家がある。それも先代の方々が、雑木林を切り開いて120町歩の畑を作ってくれたからである。それがなければ、都市化の流れで農家がほとんどいなくなっていたと思う。今は工場や道路ができたりして80町歩くらいしかないが、だからこそ基盤整備の必要性がある。基盤があるからこそ人が残る。税金の無駄遣いと言われることもあるが、道路や飛行場と同様に社会資本の一つとしての田んぼや畑を残さなければ続けていけなくなる。逆にそこがしっかりすると人も定住するし、生産も上がる。だから基盤整備は力を入れてやってほしい。

その他

(E氏)

農業試験場で知事に何か聞きたいことはないかと質問を募ったところ、女性の方から質問があり、女性が農業を新しく始めるときに、どういったところを期待するか。という質問があった。その方はアスパラをやるらしいが、知事は女性のどういったところに期待しているか。

(知事)

経営や加工については女性の力が不可欠である。消費者の半分は女性であるから、加工品等は女性の目線で見ることが大切である。

(D氏)

将来的に面積をどんどん増やしていきたいと考えたときに機械が絶対必要になる。そのために補助金を申請するのだが、すべて農地面積が足りないと言われ断られる。新規就農で始めた人たちは面積なんてあるわけがないので、あの制度はどうかと思う。

(B氏)

私はネギを作っているが、ネギは自分で種を蒔くのではなく、農協の育苗センターにお願いしている。その中で、育苗のためのハウスがいっぱいになってきている。育苗センターで種を蒔いてもらった上で採算をとれるように計算をしてやっているのだから、育苗のためのハウスのための支援等も考えなければならないと思う。

(C氏)

新規就農してからいろいろな県の機関の方にサポートしてもらった。しかし、時には担当がいなかったと言われ、情報を得られないこともあった。担当がいなくても情報共有され、つなぐことのできる仕組みがあれば、新規就農をしようと思った人がスムーズに行くと考えた。これから新規就農する方のためにも改善するべきである。

(A氏)

自分も新規就農をしようと思って情報収集していたときに、担当者が次々と変わって苦労したことがあった。人事異動があるのはわかるがなんとかならないものか。できれば最初に担当してくれた人にある程度成長するまで見守っていてほしい。

(知事)

行政には人事異動がついて回る。データベースのような形で引き継ぐようにしたい。

(F氏)

皆さんの農業の向かう方向が様々ですごくよかったと思う。農業はそのくらい多様性があるもので、一生懸命突き詰めてやってほしい。自分のやりたいことについて、続けていけば結果もついてくると思う。

(知事)

途中であきらめずに、県外から移住してきた人は特に永住するつもりでやってほしい。県の方で売り込みについては一生懸命やっていく。PRというのは単に宣伝すればいいわけ

ではない。先日、タイとシンガポールに行ったが、タイには秋田牛の専門店が8軒ある。シンガポールに三種町のじゅんさいを持っていったときはとても売れた。中国にもじゅんさいはあるが、中国のものは食べないようだ。

県では今、農業製品などを世界で流通させることに力を入れてやっている。

これからの農業を考えたときに、なぜ今、金融機関が農業に参入してきているか。それはビジネスとして成り立つからである。これからは大企業の農業参入なども考えられる。それだけ農業が注目されているということである。そういうところと協力することもあるだろうが、気をつけなければならないのが、飲み込まれてはいけないということ。自主性を持ちつつうまくやってほしい。

若い農業者の方は地域にとどまらずに世界の市場を考える時代だと思う。始めは大変だが、農業はこれからの成長産業になり得るので頑張ってもらいたい。

(終了)